

<b>〔科目名〕</b> 経営演習 I	<b>〔単位数〕</b> 4単位	<b>〔科目区分〕</b> 演習科目				
<b>〔担当者〕</b> 矢口 義教		<b>〔授業の方法〕</b> 演習				
<b>〔演習テーマ〕</b> サステナブル社会の実現へ向けた企業と組織の経営—理論と実践の融合に基づくマネジメント思考の修得—						
<b>〔演習内容〕</b> <p>本演習では、サステナビリティの視点から企業(組織)経営の在り様に関して、知識の修得に努めるとともに、実践的に知識を活用する取り組み(調査および研究報告)を提供することで、受講生の皆さんのマネジメント思考を深めていく。これによって、大学生として課題認識や解決に関する思考や方法も同時に学ぶ。</p> <p>第1に「理論・知識」として、CSR(企業の社会的責任)やSDGs(持続可能な開発目標)などサステナビリティ経営について、関連する専門書を輪読することで理論と知識の修得に努める。第2に「発表の技法の修得」であり、テキストの輪読の際には、基本となるレジュメの作成と発表方法を学び発表に取り組む。ついで、パワーポイントを用いて、内容の正確な発信に加えて、視覚的にも効果的な発表に取り組むことで発表の技法を修得する。</p> <p>第3に「実践調査活動」を行う。これは、学修した理論や知識を深めることを目的に、実際に調査活動を行い、調査・分析をして、最終的な発表に臨むものである。調査対象は、調査を受け入れてくれる対象の都合や予定で変わってくるものの、企業、NPO(非営利組織)、自治体、あるいはこれらの連携など営利・非営利を問わず組織的な営みに関する行為とする。地域のサステナビリティに貢献する取り組みを見ていく。なお、先方との調整が付かない場合には、実地調査は3年次演習(経営演習Ⅱ)に延期する可能性もあり得る。その場合には、教員が作成したビジネス・ケースを分析することで、トレーニングを行い次年度の活動に備える。</p> <p>第4に演習の活動を通して、「チームワーク」について実体験を通して理解することである。チームという組織への貢献やメンバーとの協働を体験し、組織的に活動するとはどのようなものかを理解する。いずれにせよ、これら1~4の内容は、受講生の社会人基礎力を大いに向上させることが可能になるものである。</p>						
<b>〔科目の到達目標〕</b> (1) サステナビリティが、経営や地域の課題として重要となる要因と背景を理解し説明できるようになる。 (2) 経営学の専門書について、要点理解に加えて、批判的に読み込み自身の見解を述べられるようになる。 (3) 効果的なプレゼンテーションにより、聞き手の関心を高められるような発表方法を身につけられるようになる。 (4) 調査活動を通して、経営学の理論・知識を実践的スキルに結びつけられるようになる。 (5) 組織として協働することの意味を理解し、また実際の協働に活かすことができるようになる。						
<b>〔ディプロマ・ポリシー(DP)との関係〕</b>						
学部				学科		
DP1	DP2 ○	DP3 ○	DP4 ○	DP1 ○	DP2 ○	DP3
<b>〔前提条件〕</b> 前提条件はとくにないが、真面目に取り組む姿勢を有する学生が望ましい。また、経営演習 I で調査活動を実施する場合には、ゼミの皆の都合に配慮できたり、積極的に調査・研究活動に協力する姿勢が望まれる。個人の能力よりも、演習に臨む「姿勢」や「態度」を重視する。						
<b>〔学修の課題、評価の方法〕(テスト、レポート等)</b> 以下の観点から総合的に評価する。まず、①テキストの輪読(30点満点)について、レジュメ(15点)、パワーポイント発表(15点)で評価する。レジュメについては、内容要約の適格性(5点)、レジュメの見やすさ・整理(5点)、自身の意見や疑問(5点)、パワーポイント発表では、視覚的な工夫(8点)、および内容要約と意見(7点)という内訳になる。						

ついて②実践的な調査活動(70 点満点)が大きなウェイトを占めることになる。まず、これには分析方法への取り組み状況(15 点)、調査・研究活動への協力姿勢(30 点)、最終的な提案内容・成果(25 点)で評価する。分析方法では、SWOT や STPMM などの課題提出(5 回×3 点)の状況と内容の観点から見る。調査・研究活動への協力では、共同作業への積極的な参加、貢献、リーダーシップ発揮などの姿勢を評価するものであり、真面目に取り組んでいれば上記の点数(30 点)に達する。最後に提案内容・成果では、分析枠組みの適切な使用(10 点)、発表スライドの見やすさ(5 点)、戦略の独自性と根拠(10 点)で評価する。また、外部者へ発表できた場合には、彼らからの評価も加味する。

**【教科書等】**  
 矢口義教(2023)『地域を支え、地域を守る責任経営—CSR・SDGs 時代の中小企業経営と事業承継—』創成社 (ISBN:978-4-7944-2612-3)  
 佐久間信夫・矢口義教・山田雅俊編著(2025)『ESG 経営の展開—サステナビリティの実現へ向けた企業行動の変容—』同文館出版 (ISBN:978-4-495-39105-8)

**【実務経歴】**  
 なし

授業スケジュール

時期	テーマと内容
4 月から 5 月上旬	テーマ:オリエンテーション、テキストの読解のポイント、レジュメを用いた発表 内容:まず経営演習 I で学ぶことの概要、取り組む姿勢、得られる知識やスキルに関する説明、および各自の自己紹介を行う。そのうえで、テキストを読むにあつて、内容の理解に加えて批判的に捉える読み方を学び、レジュメを用いて発表を行う。聴講側の学生は、発表者の発表方法から良い点を学ぶとともに質問する力も養う。
5 月中旬 から 6 月 中旬	テーマ:パワーポイントを使った発表方法とその実践 内容:教員がパワーポイントを用いた模擬プレゼンをすることで、分かりやすく、かつ効果的なプレゼンテーションについて学び、受講生がパワーポイントを用いて発表を行う。聴講側の学生は、発表者の発表方法から良い点を学ぶとともに質問する力も養う。
6 月中旬 から 7 月 中旬	テーマ:実地調査の説明、分析枠組み概要、アンケート調査項目の作成 内容:調査対象⇒事前準備⇒実地調査⇒分析・課題析出プロセス⇒ベンチマークやベストプラクティス⇒戦略提案といった一連の流れを学ぶ。そのうえで、実行する調査対象に対して、回答者側の立場を考えながら実際の質問票の作成に取り掛かる。
7 月下旬 から 8 月 月上旬	テーマ:調査活動の実施 内容:現地現物で調査対象を訪問する。担当者からの講義を受けたり、現場を目視して、調査対象に対するイメージを浮き彫りにしつつ、来訪客や企業などへのアンケート調査やヒアリング調査を実施して情報を収集する。
9 月下旬 から 11 月上旬	テーマ:調査対象への分析方法の理解 内容:PEST 分析、SWOT 分析、TOWS 分析、STPMM 分析について、教員が説明する。また、戦略提案の際の CSV(共通価値創造)の重要性についても触れる。アンケート調査の集計について、クロス集計、グラフ(ヒストグラムや箱ひげ図など)作成などの使い方とともに、統計的な分析について、相関分析、t 検定、回帰分析などについてエクセルを使用して実習的に学ぶ。
11 月中 旬から 1 月中旬	テーマ:調査対象の分析、戦略案の確定、発表 内容:まず、PEST 分析、SWOT 分析、TOWS 分析を行い、現状を認識して課題を析出して戦略の大まかな方向性を示す。ついで、アンケートからのデータに基づいて、相関分析や回帰分析などを通して、情報の特徴を見つけ出し戦略提案に生かす。そして、適切な分析を通して、新しいアイデアだけでなく、経営学的な分析に基づく論理性も高めた戦略案を完成させて、戦略提案発表会に臨む。